

生演奏の意味合いを踏まえたスピーカーの配置

—演奏会場での音空間デザイン—

森松慶子（ライター、作編曲、電子オルガン演奏）

司会：柴田 薫 書記：金銅英二（文責）

電子オルガンをはじめとする電子楽器はスピーカーから音を発生している。スピーカーの音の指向性には、いわゆる生楽器とは異なる特性があり、スピーカーの配置によって聴衆への音の届き方が変わってくる。発表者の森松慶子氏は長年にわたり多様なニーズにこたえる演奏経験を持ち合わせている。これまでの豊富な経験から現在の電子オルガンにおけるスピーカーの配置をどう考えるべきなのか会場の参加者にも問かける発表であった。

演奏の環境によっては専門の音響技術者が同行し、他の楽器や声とのバランスを調整してもらえる。しかし、専門の音響技術者が同行しない演奏環境、また、現場の音響担当者と十分な意思の疎通が難しい場合、さらには音響担当者が存在しない現場では、音楽の内容を心得ている音楽家自身が、その内容を聴衆に届けるために最適なセッティングをするのが良い、というのが発表者のこれまでの演奏経験から得られた教訓である。

奏者は、自分の発した音が聴衆の耳に届くまでを意識すべきではないか、という考え方はそう新鮮なものではないが、長年電子オルガンを演奏していても、外部スピーカーとの接続方法もわからない、また接続を面倒と感じてしまう人もおり、電子オルガンを個人個人が自由にいろいろな場所で演奏する時の一つの足かせにもなっているのが現状である。

発表者が PA セッティングに関して最も大切にしていることは、

- ①生演奏の臨場感が伝わる
 - ②共演者、聴衆、電子オルガン奏者自身に、作編曲の意図が伝わりやすい適切なバランスで音楽が聞こえる
- の2点。

①に関しては、スピーカーから音が出ている楽器であっても、生演奏の臨場感はいわゆる「生楽器」と同等であるという信念から、発表者は、コンサートなど、演奏が主役の場面では、生演奏の臨場感が聴衆に明快に伝わる PA セッティングに留意している。

演奏の臨場感とスピーカーの位置（音の出てる場所）とは深い関係があることを示す例として、発表者は2つの自身の経験を挙げた。

一つはミュージカル公演で、歌手の声歌手の場所から遠い位置のスピーカーから聞こえてきた際、生のステージを見ている印象が薄らいってしまった例。

もう一つは、広い会場で全館放送のような多数のスピーカーで発音させて演奏した際、音楽は会場全体に満遍なく届いてはいるが、演奏場所の横や近くに聴衆が居ても、その聴衆が横で奏者が生演奏していることに気づいてもらえない状況を招いたという例である。

特殊な音響効果を狙う場合は別として（それもスピーカーを用いる面白い効果であることは発表者も認めている）、生演奏の臨場感を優先したいのであれば、スピーカーはなるべく楽器のそばに置き、楽器がある場所から音も出るという、視覚と聴覚の一致を図るのが良いであろうというのが発表者の考えである。

スピーカーは一般に、音の指向性をはっきりしており、スピーカーの向いている方向には直接音の大きな音が届くが、音の進む方向から外れた場所では近くでもあまり音が聞こえない。また、音の進む方向の域内であっても、直接音は距離の2乗に反比例して減衰するため、間接音が多い生楽器や声楽家の声に比べて、距離による音量の落差が大きい。

このため、スピーカーを奏者にも聞こえるようにステージの奥から客席に向けて置くと、ステージ上ではスピーカーの音が非常に大きくなり、マイクを使わない共演者がいた場合には共演者の音が聞きにくいほどになる。しかしステージ上でバランスが良いようにスピーカーの音量を落とすと、客席の後ろにはスピーカーの音がほとんど届かないこともある。

そのため通常は、ステージ上には奏者用のモニタースピーカーを置き、客席用には別のメインスピーカーを向けて双方とも聞きやすくバランスをとるのであるが、ステージと客席で音空間が分断される（同じ音を聞いていない）のも生演奏では残念であることから、発表者は共演者（アンサンブルの場合）、聴衆、自分自身に最も適切なバランスと音質で音が届くスピーカーの向き、位置を模索してきた。

その結果、電子オルガンの近くに置いた2つの外部スピーカーを、ステージ後方の壁の斜め上方に向けて起き、間接音を利用して音空間を作るというスタイルに行き着いた。直接音に頼らず間接音を活用することで、ステージでも客席でも極端なバランスの不一致を防ぐことができる。この場合、電子オルガン本体のスピーカーは使わない。

フロアからは、オペラなどの現場で演奏している小林ゆみ氏等複数の参加者から、同じ方法でオーケストラピットで電子オルガンを演奏している、という声が上がった。また、発表後コルグ取締役三枝氏から音の波長と会場の関係などについての質問やコメントがあった。また小熊達也氏からスピーカー2本の距離やパン設定についてのコメントもあった。

このテーマでワークショップを開催しノウハウを共有したいという森松氏のプランを是非とも実現してもらいたい。